

亜炭香報

亜炭広報社
編集人 伊達伸明

第五号

平成二十五年
三月三十一日

埋もれ木 人と時間の接点

古今東西 交流取り持つ

その言葉の響きのせいか、あるいは奥深い木肌の魅力ゆえか。「埋もれ木」は単なる工芸素材としてではなく、時間・空間を飛び越えて人々の心を惹きつけ、結びつけてきた。今号ではコミュニケーションインターフェイスとしての埋木について、古今の事例から考える。

山埋木 世代を超えて

高校で体験授業



作業に集中する生徒たち。奥が鈴木さん

先月9日、土曜日の宮城野高校の教室に並べられた埋木細工の作品に約20名の高校生の視線が注がれていた。この日は、全国唯一にして最後の一人といわれる工人小竹孝さんを講師に招き、埋木で箸置きを制作体験するという「放課後講座」。

宮城野高校も参加する「復興へ！高校生が架ける虹のアートプロジェクト」と小竹さんがともにマチナカアートの企画協力者だった縁で、「高校生に埋木の魅力を伝えたい」という双方の思いが今回実現した。高校生にとって埋木は、作品はもちろん名前を聞くのもほとんど初めて。まず小竹さんから材質や歴史、



悠久の土より出づるウモレダケ

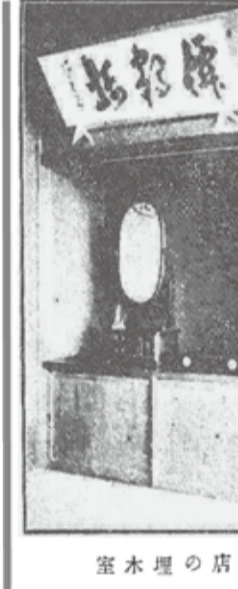
自身の作品についての話があり、続いて今回のために提供された材料から気に入ったものを一人2個選んで制作が始まった。今回の箸置き作りは、ポイントとして、埋木らしいざらざらした表面を残しつつ、一方でつややかな面を作り出すこと。まずは材料の中央付近を箸が置けるように刃物を使って凹ませる。割れないように成形できたら、次に耐水の紙やすりで水研ぎする。目の粗いものから細かいものまで使い分けて、いいねいに磨くと見事な木目が浮き上がってくる。そのあと30分ほど自然乾燥させ、最後の仕上げに透明ラッカーを塗れば完成。

太古の樹木の独特の素材感を体験した生徒たちは、「化石なのに逆目があることも分かり、元は木であることがよくわかりました」「小竹さんはいとも簡単に削っていきませんが、実際にやってみるとなかなか思うように丸ノミを使えませんでした」と、難しさも実感。培われた技術の奥深さを知る機会となった。

川埋木 埋木の間でもてなす

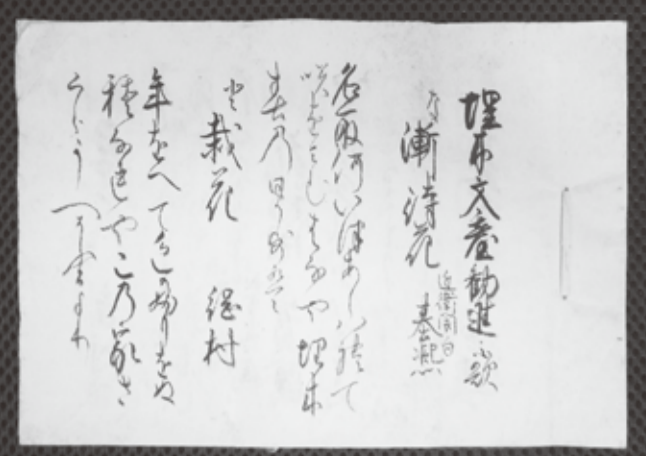
針久旅館 停車場前支店

かつて仙台停車場前(現バルコ付近)にあった針久旅館には知る人ぞ知る川埋木の間にあった。大正4年刊の「仙台巡杖記」(渡邊慎也氏蔵)によると、材料となった川埋木は、のちに瑞巖寺の埋木書院となる八木久兵衛宅のものときほど遠くない場所から採れ、そ



室木埋の店支久針

れに勝る巨木であったという。旅館の二階と三階の計8室の間、床柱、戸棚などに使われ、さらに壁には、香炉灰として珍重される埋木を燃やしたあとの灰が練り込まれていた。投宿した文学博士の物集(もずめ)氏はその潤滑な色合いに心打たれ、和歌を一首詠んで主人に贈ったという。郷土の誇るべき特産材を手に入れた主人が、加工転売して利己に走るのではなく、交通網が進歩し人々の往来が活発になり始めた時代の潮流を活かして、旅館という形で遠方からの人々の目に触れさせ伝えようとした。その心意気のみならず名建築であった。



埋木文臺勸進乃歌 冒頭31字
名取川 春の日数は頭われて
花にぞ沈む 瀬々の埋もれ木

大條伊達 家文書
3年ほど前、大條伊達家所蔵の文書から「埋木文臺勸進乃歌」という歌集が発見された。花を歌題とした31首を集めたものだが、それぞれ第一字をつなぎ合わせると埋木を詠んだ歌になるという、遊び心にあふれた歌集である。賦物(ふしもの)と呼ばれる一種の言葉遊びによる交流形式で、平安時代のいろは連歌などにも類例が見られる。この歌集は江戸中期、第四代藩主伊達綱村公から吉村公の

時代(官職名の重なりなどからの推定では元禄10年〜17年頃)に作られたものを当時の当主、大條監物宗道が写したと推定されている。第一首、近衛関白其照の「名取川いつ頭われて咲きを見む 花や埋もれ木春の日数(ひかず)は」に始まり、綱村公の第二首「年を経て」・吉村公の第三首「流水の」・武者小路実陰「花季にあれば」・吉田兼連(兼敬)「春の日を」と続く。これらの第一字をつなげば「なとりがは」となるわけだが、興味深いのは、ずらり名を連ねる31人の作者が、いずれも仙台

と京都を代表する文化人であるという点。古く万葉の時代から歌に詠まれ増幅・定着した名取川と埋木のイメージが、時代が下っても薄れることなく都人の心の風景となり、折々の歌となつて仙台の人々と共有されてきたことがこの歌集から読み取れる。

成立の背景など不明な点が見られるが、本紙では全文掲載を目指す。

平成12年に閉店した橋川埋木店。職人だった重雄さんが遺した埋木材を亜炭香報が、15日里帰りした。妻康子さんは「おとうさんの埋木が活かされるのはうれし」と話し、付け根の磁石で鉄製の茶筒に群生したキノコを一つ「収穫」した。

山埋木 遺品を今に

橋川埋木店
古学の資料素材として一部預かっていたが、その断片から制作した埋木製キノコが、15日里帰りした。妻康子さんは「おとうさんの埋木が活かされるのはうれし」と話し、付け根の磁石で鉄製の茶筒に群生したキノコを一つ「収穫」した。

山埋木 磨いて弾む会話

23日、青葉区荒巻の青葉の森緑地で「亜炭の記憶をたどる旅」と銘打った野外学習会が催された。第一部は、仙台商業高の西城光洋さんが地学の観点から亜炭について解説。第二部は亜炭香古学の伊達伸明さんが「埋もれ木にふれる」と題して、小さなカケラを磨いて肌合いを楽しむ体験講座を行なった。参加者はめったに触れる機会のない原木を手に取り、まずはひんやりと重い感触を味わったあと、紙やすりでひたすら表面をゴシゴシ。次第に美しい木目が現れると、互いに見せ合ったり使い道のアイデアを語り合うなどして魅力が堪能した。

山埋木 秋保工芸の里の環境計画

秋保工芸の里の環境計画を手がけ、自身も加工実験をした東北工業大学ライフデザイン学部の菊地良寛教授は「原材料が限られている以上商業化には不向きだが、実物を知る世代周辺を対象にした仮設住宅などでの協同作業に活用していきたい」と話す。

※連絡先等の引用は奥付のまま(仙台郷土研究会については現在の連絡先)